アトッサの夢

――ヘレネス対バルバロイ――

松　平　千　秋

1

アイスキュロスの悲劇「ペルシア人」の冒頭に近く，太后アトッサが登場して，ペルシアの長老たちから成るコロスに向って，前夜見た不吉な夢を物語る条りがある（*Pers.* 181—199)。その夢というのはこうである。二人の美女がアトッサの夢枕に立ったが，一人はペルシア風の，もう一人はドーリス風の服装をしている。二人は血を分けた姉妹（*κασιγνήτα γένους ταὐτοῦ*）であるが，一方はヘラスを，他方はギリシア以外の国（*γαῖαν βάρβαρον*）を母国として住んでいる。どうやら二人の間には揉めごとがあるらしく，相争っている様子であったが，そのときアトッサの息子，即ちクセルクセスが二人の女を制して，（さながら馬を扱うように）自分の馬車に繋ごうとした。一方の女は唯々諾々と軛を受けたが，他方の女は逆らって暴れだし，とうとう軛を真二つに割いてしまった。その勢いに馬車から顚落したクセルクセスの傍らには，父のダレイオスが憐れむように立っている。父の姿を見ると，クセルクセスは（悲み恥じて）身に纏った衣服を引き裂く，という夢であった。

このアトッサの夢の意味するところ――もっと正確にいえば，アイスキュロスがこの夢に荷わせようとした意味――は一見極めて明白であるように思われる。それは，やがて使者によってもたらされるサラミスの敗戦の報に先立って，アトッサに示された不吉な予兆に外ならず，従って二人の女のうち，隷従を肯ぜずに反抗した女はギリシア乃至はヨーロッパを，軛を甘受した女はペルシア乃至はアジアを象徴するもの，と解するのが最も自然であろう。尤も，この一見明白な解釈にも疑問を挿む余地が全くないわけでもないのであるが[1]，ここではこの点にはこれ以上立入らぬこととし，むしろ二人の女が「血を分けた姉妹」と記されていることに注目しよう。

ギリシア語とペルシア語とが，ともに印欧語族に属する二分派にすぎず，従って民族

としても恐らく血縁関係にあったであろうとする見解は，今日ではほとんど自明とされているところであるが，古代のギリシア人やペルシア人がそのような同族関係について，確実な知識はもちろん，漠然とした意識すらもっていたかどうかは，甚だ疑わしい[2]。少くとも，それを肯定する文献上の資料は皆無に近いといってよかろう。従って先に述べたアトッサの夢見の敍述の中で，もし二人の女をギリシア（ヨーロッパ）とペルシア（アジア）[3] の象徴と見る解釈に誤りがないとすれば，この二人を姉妹としていることは，ギリシアとペルシアとの間の血縁関係を暗示したものとして，頗る珍重すべき文献ということになる。尤も，アシアとエウロペとを，ともにオケアノスとテテュスから生れた，いわゆるオケアニデス（「オケアノスの姫たち」）として系譜づけることは，すでに早くヘシオドス（c.700）に見られる（*Theog.* 375 sqq.）。しかしこれなどは，明らかに説明的な分類による系譜化にすぎないし，またペルシア人の祖としてのペルセスを，ギリシアの英雄ペルセウスと結びつける伝承（Herodot. VII 220）なども，語音の相似に基く思い付きにすぎないであろう。また一方では，カドモスやペロプスの例に見られるように，ギリシア人自身彼らの先史時代に外来の要素の混入したことを認めている事実も，思い合せる必要があろう。従って，「ペルシア人」において，ペルシアとギリシアを象徴すると考えられる二人の女が姉妹とされていることにも，余り深い意味を読み込まず，単にヘシオドスの伝統に従った表現にすぎないと考える方が穏やかなのであろう。あるいはむしろ思弁的に，それぞれ異った体制をもちながら，共存すべく神意によって定められた世界秩序を，支配欲にかられて破ろうとしたクセルクセスの驕慢と，神によるその懲罰とが，悲劇「ペルシア人」の基本的発想であるという風に解することも可能である[4]。同じく読み込みすぎる嫌いはあるにしても，この方がアイスキュロスの思想に即した見方であることは否めないからである。

2

要するに，ギリシア人とペルシア人とは，互いに同族関係を意識することはほとんどなく，言語，風俗，宗教，政治体制，その他あらゆる点で異種の二民族として対立していたと見るのが実情に近いと思われる。そのことは，ギリシア人が自己と異民族とを区別するのに常用した語である「バルバロス」という言葉が，最も頻繁にペルシア人（メディア人を含めて）を示し，多くの場合ほとんどペルシア人の呼称の代用にさえなっている事実が，一番良く証明している。ギリシア人が接触した異民族の数は決して少なく

はなかった。エジプト人，アッシリア人，フェニキア人，スキュティア人等をはじめ，群小の民族を加えれば相当の数に上る筈で，これらはいずれもギリシア人にとってはバルバロスであり，また事実そう呼ばれていたのである。従ってバルバロスという語が，ほとんど par excellence にペルシア人の呼称になったという事情も，結局はペルシア人との接触，対決の頻度が，他の異民族に対するよりも圧倒的に高かったことに由来するものに違いないが，それなればこそまた，ギリシア人の対異民族観と，それに伴う自民族の特質についての省察と自覚とが，対ペルシアの線を主軸として形成されていったことに着目しなければならない。

バルバロスという語の原義や，その語義の変遷や分化の経路を詳細に跡付けたり分析することは，本論の目的ではないが，叙述の順序として，簡単にこの特異な語の含蓄するところを要約しておく必要はあろうかと思われる[5]。

バルバロスという語の，いわゆる語原の問題は，われわれの考察にとって余り深い関連をもたないので，語原辞典にゆずることにするが[6]，本来擬声語として発生したであろうことは，容易に推定できる。それはストラボン（Strab. 14, p.662）や古辞書にも既に指摘されている通り，舌足らずの，わけの判らぬ話しぶりを感覚的に描写した語であったのであろう。ホメロスにバルバロスなる語が使用されていないことは，よく知られている事実であるが[7]，このことは既にトゥキュディデスの注意をひいていた（Thucyd. I,3)。ここでトゥキュディデスは，ホメロスに非ギリシア人の総称としてのバルバロスの語が用いられていないのは，当時はギリシア人についての総称もまだ確立していなかったから，従ってその対立概念としてのバルバロスの語も用いられなかったのであろうと説明している。この説明に対しては，今日異論を唱える余地はあろうが，いかにもトゥキュディデスらしい論理的な解釈ということができる。

舌足らずで，意味の判らぬ言語というのは，必ずしも，異国語に限らないわけであるが，大部分の場合異国語を対象とすることはいうまでもなく，従ってバルバロスの語はギリシア語以外の言語を話すものを指す専用語のようになり，さらに言語に限らず，ギリシア以外の人物，事物一般にも適用されることとなる。分類的にいえば，これがバルバロスという語の第二の意味である。そしてこの第二の語義が最も慣用的なものであったことは，無数の用例から容易に察することができる。この第二の語義には，元来ほとんど価値的な判断は含まれておらず，単にギリシア以外のもの，非ギリシア的な人や事物を指すにすぎなかったと考えられるが，これがある時期から価値判断を含み，多分に蔑意を寓するようになる。つまり非ギリシアということが，ギリシア（人）よりは劣っ

たものという意味に直結してくるのである。これがいわばバルバロスの第三の語義である。ただここに断っておかねばならぬことは，上に列挙した三つの語義は，大体において発生の順序に従っていることは疑いないが，先出のものが後出のものによって，順次とって替られたという意味ではない，ということである。バルバロスという語の使用を歴史的に通観すれば明らかなように，この語の基本的な語義は，終始第二のものであったといってよく，第三のものは時代の下るにつれて用例は増加するとはいえ，第二の語義を凌いで主位を占めることはなかった。

この第二の語義から第三の語義が派生してくる情況とその時期とを，文献に現われた実例によって調査することは，非常に興味のある仕事で，ことに筆者が特に関心をもっている，ギリシア人の対異国観，中華思想ともいうべき自国文化に対する優越感の問題には直接関連をもつものである。しかしこの操作は一見簡単そうに見えて，実は仲々そうでない。第一，実例に即して考える際には，第二類とすべきか第三類に入れるべきか，判断に苦しむ場合が少くなく，従ってその分類も多分に主観的判断に左右されざるを得ない。例えば第三類の語義における代表的な用例とされるアリストパネスの「雲」492 の場合にしても，絶対的な確実性をもって第三類に加えてよい，ともいい切れまい[8]。私見によれば，「雲」よりも古く，そしてむしろ確実性も高いと思われる用例がもう一つある。Herodot. VII 35 に現われるもので，クセルクセスの命によって，ヘレスポントスに鞭打ちの刑を加える刑吏の吐いた言葉に対する，作者の評言ともいうべき章句である[9]。*βάρβαρά τε καὶ ἀτάσθαλα* を筆者は敢えて「野蛮不遜（の言）」と訳してみたが，ここでも前例にならって（註8参照）「ギリシア人には思いも及ばぬ不遜の言」と訳しても，ほぼ原意を伝えることはできよう。ここでも *ἀτάσθαλα* という形容詞がバルバロスの語義を補い限定する機能を果している。

3

それでは，バルバロスという語が，第三類の語義のようなニュアンスを帯びてくるのは大体いつ頃からであるかというと，通説ではペルシア戦争がその転換の決定的な要因であったとされる。未曽有の危機に直面して，ギリシア人の民族意識が急激に昂揚し，やがて大敵を撃破し民族の独立を確保した結果，自己の文化全般にかってない優越感を抱くようになったことが，バルバロスの語義にも微妙な変化をもたらしたというのである。この説はいかにも尤もな説であるが，全面的に受け容れるには，いくぶん危険が伴

うようにも思われる。いずれにしても，バルバロスの用例によってこの説を論証したり反駁したりすることは，前例からも推量されるように，文献上の不足——特に五世紀以前の文献の乏しいことは，ほとんど致命的な欠陥である——から不可能に近いのであるから，ここでわれわれは一応バルバロスの語から離れて，別の面からこの問題を考えてみよう。

一般的な現象としては，国難によってナショナリズムの気運が促進され，さらに戦勝によってそれが優越感となり，異民族を蔑視する風潮が起こる，というのが自然的なプロセスであろう。ギリシアの場合も決して例外であったとはいえないであろうが，ただその度合は他の多くの場合に比して，それほど強くなかったのではないかと思われるふしがある。ギリシア人の民族意識とでもいうようなものが，かなり根深いものであったことは，歴史的に見ても明らかなことである。民族的な自覚が目覚めるには，他民族との接触ということが不可欠な契機を成すことはいうまでもないが，ギリシア人の場合には，遠くミュケナイ時代までさかのぼらなくとも，例えば，イオニア在住のギリシア人は恐らく十世紀以前から東方の諸民族と接触したであろうし，ことに八世紀以降数世紀にわたる，いわゆる植民時代には，エーゲ海を中心にして四方に向って，ギリシア人と様々な異民族との接触が行われた。そしてその接触の間に，ギリシア人は自民族と他民族との相違を直接の体験によって認識することができ，自己の文化のもつ特異性について，次第に深刻に反省するところがあったに違いない。いうまでもなく，ギリシア人が接触した諸民族の文化は多様で，一方には世界で最も若い民族（Herodot. IV 5）と自称するスキュティア人のような後進民族もあれば，エジプト，アッシリアのような桁外れに古い諸文明もあった。リュディアやペルシアにしても，少くとも物質的な面では当時のギリシアの水準を遙かにぬきんでていたわけで，ギリシア人はそれらの諸国の文化的先進性に気付かぬほど愚鈍ではなく，気付きながら無視するほど狭量ではなかったであろう[10]。しかしここでむしろ奇異にすら思われるのは，それらの先進文明に接し，その優秀性を讃美しつつも，ギリシア人がほとんど劣等感を抱かなかったらしいことである。それはギリシア人の精神主義というようなことで簡単に説明し去ることができるものではない。現に例えばヘロドトスが他民族において驚嘆し推賞するのは，単に物質的技術的な面だけではなく，宗教，倫理その他風習の様々な分野にも及んでいるのである[11]。つまりギリシア人は，かなり早い時期から自己の文化の特質についてかなり明確な自覚と，それに伴う矜恃とをもっていたと考えられ，先進文明に接しても自己のペースを崩さぬだけの主体性を堅持していたのであろう。このことは例えばヘロドトスの物

語る，クロイソスに対するソロン（I 29—30），あるいはクセルクセスに対するデマラトス（VII 101—104, 209）の態度によく示されている（それが史実であるかどうかは，余り重要なことではない）。その点で対照を成すのは，ギリシアの文物を受容しようとする熱意の余り，同国人の反感を買って非業の死をとげた，スキュティア人アナカルシスとスキュレスの物語であろう（Herodot. IV 76—80）。そこには，まだ文化の名にも値しない原始的段階に留っていた遊牧民族において，いわゆる文化的先覚者の陥り易い宿命とでもいうべきものが，如実に反映している。ギリシア人が早くから民族的自覚に基く主体性を堅持し得たことについては，なんといってもその永い歴史的伝統が最大の支柱となっていたと考えねばならない。ミュケナイ時代以来の文化的伝統が，十二世紀を境とし数世紀にわたる断層にも拘わらず，歴史時代に至るまで脉々として続いていたことは，ホメロスの叙事詩がその最も雄弁な証人である。

4

それでは，ギリシア人が早くから意識し誇りとしていた彼等の民族的特質が，どのようなものであったかという問題に対しては，われわれはかなり豊富で確実な資料をもっているといってよい。それは，この論題に関する限りは，われわれは必ずしも古い文献だけに頼る必要はないわけで，むしろトゥキュディデス，プラトン，アリストテレスなど，五世紀以降のすぐれた思想家の書き物の中に，一層透徹した洞察を見出すことができるからである。けれどもここでは，なるべく抽象的な議論に陥らぬようにするためにも，また本論に重大な関わりをもつペルシア戦争と時代的にも接触を失わぬためにも，われわれの考察の資料としては主としてヘロドトスの記述に頼ることにしよう。

ギリシア文化の基本的な要件としては，すでに言い古されたことではあるけれども，やはりなによりもまず「自由（ἐλευθερία）」，およびそれと表裏を成す「法（νόμος，伝統的に守られてきた慣習，という方がより正確であるが）」とを挙げなければならない。

ギリシア人が自己の堅持する自由について，いかに確固たる信念をもち，これを誇りとしていたか，また自由と法との関連についてのギリシア的解釈がどのようなものであったかを例示する locus classicus は，スパルタ人デマラトス[12]がクセルクセスの下問に答えた言句の中に見出される（VII 104）。

「……かれら（ギリシア人）は自由であるとはいえ，いかなる点においても自由であるのではございません。かれらは法という主君を戴いておりまして，かれらが

これを怖れることは，殿の御家来が殿を怖れるどころではないのでございます。」

個人の自由と，それによって守られる人格の尊厳ということが，東方諸国のみならず他のほとんどすべての異民族と対比して，ギリシア人の最大の特質であるという自覚である。そして，ギリシア人の生活において占める自由の地位を，東方諸国における独裁君主のそれに擬することによって，デマラトスの主張は一層生彩を加えているのである。デマラトスは上に引用した同じ箇所の少し前のところで，次の様にもいっている。

「……そもそもわがギリシアの国にとっては，昔から貧困は生れながらの伴侶のごときものでありました。しかしながらわれわれは，叡智（σοφία）ときびしい法（νόμος）の力によって，勇気の徳（ἀρετή）を身につけたのであります。この勇気があればこそ，ギリシアは貧困にも挫けず，専制に屈服することもなく参ったのであります。……」(VII 102)

ここでは叡智ということが，法と並んでギリシア文化の基本的要請として挙げられる。同じくギリシアの精神史において重要な概念である勇気の徳も，叡智と法とが相寄っておのずから醸し出す美徳なのである。尤も叡智ということは，自由とは違って必らずしもギリシア人のみが誇りうる特質ではない。エジプト人やペルシア人のすぐれた智慧については，ヘロドトス自身たびたび，しかも卒直にその優秀性を認めている。しかしながら，ギリシア人の抱いていた叡智の観念の中には，単なる知識とか技術とかを超えるものが含まれていたわけで，その限りにおいてギリシア人はやはり叡智をもって，自己と他民族とを区別する重要な規準と考えていたのであろう。そのことはI 60に極めて明確な表現で断言されている。

5

小アジアにおけるギリシア人の東方諸国民との接触は，はじめからむしろ平和的なもので，互いに自主権を尊重して相侵すということはなかったらしい。東方の圧力の加わったのは，リュディアのメルムナス家（メルムナダイ）の最後の王クロイソス以後とされるが，リュディアの対ギリシア人政策はかなりゆるやかなもので，一般のギリシア人には自由侵害の意識を強く感じさせるほどではなかったであろう。しかしクロイソスがペルシアのキュロスの軍門に降り(547/6)，イオニアがペルシアの勢力下に入るとともに，情勢はギリシア人にとって悪化した。従って547/6の年をもって，ギリシア人が東方に対して積極的な反撥感を抱くに至った転機とする見解も生ずるのである[13]。しかし実情

はその後といえどもさほど変らず，ペルシアの対イオニア政策は決して苛酷なものとはいえず，既にリュディアへの服属に馴れていた一般ギリシア人にとっては，さほどの苦痛を与えるものではなかったのではないかと考えられる。それにも拘わらず，その後次第に両者間の事情が悪化し，遂に499のいわゆるイオニアの反乱にまで発展したのは，ギリシア人の本性的な自由への執着もさることながら，むしろギリシア諸都市内部の一部の野心家（例えばミレトスのアリスタゴラスやヒスティアイオスのごとき）が，自己の政治的野望を遂げるために起こした様々な策謀が主因ではなかったか，と筆者は推測する。この頃のギリシア人は自己の民族的特質の維持には強い執着を示していたとはいうものの，東方の勢力に対しては終始受動的な立場にあったのであり，争闘に立至るにしても，それはあくまで防衛的な性格のものであった。アイスキュロスの「ペルシア人」が普通ならば当然祝勝的な調子を帯びるべき情況に書かれたにも拘わらず，戦勝国民としてはむしろ異例ともいうべき謙虚な――あるいはむしろ敬虔ともいうべき心情に貫かれていることも，その様な態度の表われと見られる。ペルシア戦役におけるギリシア側の勝利は，ギリシア側の成功というよりも，神意を犯したクセルクセスの驕慢が神の懲罰を受けた結果，とする思想である。

しかし戦勝の結果，加速度を加えたギリシア――ことにアテナイの国力の伸張は，次第にこの謙虚さを忘れさせてゆく。そしてその当然の結果，従来守られてきたギリシア的なペースが狂い出し，ペロポネソス戦争を誘致し，アテナイの没落につながったといえるのであろう。ペロポネソス戦争は，いうまでもなくギリシア対異民族の争闘ではなく，それこそ正に同族相喰む内戦というべきものであった。しかしギリシア的思考法によれば，それはクセルクセスのヨーロッパ侵攻と本質的には同じ驕慢のなせるわざであったのである。アトッサの夢に現われた，相争う二人の女は，ここではアテナイとスパルタである。そして抗らう一方の女を無理矢理に軛に繋ごうとして顚落するクセルクセスの姿がそこにないのは，アテナイ（の指導者層）がその役をも兼ねたからに外ならない。

後　記

ここ数年間ヘロドトスにかかわり合ってきた筆者は，常にギリシア人の対異国観，またはギリシア的中華思想という問題を念頭に置かざるを得なかった。この小文はしかし，その問題についてのノート，あるいは精々中間的レポートにすぎないことをお断りせねばならない。なお，註（11）にも一寸触れたように，小論が主として典拠としたヘロドトスの思想あるいは心情が，果して当時のギリシア人の思想なり心情なりを代表してい

るかどうか，ということも筆者の気にかかる問題であった。暫定的な結論としてやや公式的な表現を用いれば，そこにはいわゆるイオニア精神によって代表されるような，本土の伝統あるいは因襲にとらわれない自由と進歩的性格とともに，これまた植民地独特の保守性が並存しているといえるのではなかろうか。しかしこの問題は稿を改めてさらに詳細に考察される必要があろう。

（筆者は京都大学文学部教授）

註

1) 反抗する女がギリシア乃至ヨーロッパを象徴することには問題はないが，従順な女をペルシア乃至アジアと解さず，アジア在住のギリシア人とする説も，相当有力な支持者をもつ。これらの論議については，H. D. Broadhead, *The Persae of Aeschylus*, Cambridge, 1960, p. 78参照。

2) その点に関しては，ギリシア人とローマ人との間も，相似た事情にあったといえるであろう。比較言語学の果した貢献の大きさが改めて認識される所以である。

3) ここで，括弧の内と外とが全く同一の観念だという意味ではない。ギリシアとペルシアとが，それぞれヨーロッパとアジアのチャンピオンとして含意されている，というほどの意味である。あるいは，ペルシアの版図と，ペルシア支配から独立している地域との対比，という風にいってもよい。

4) Hans Diller の説。*Grecs et barbares* (Entretiens sur l'antiquité classique, Tome VIII), Vandoeuvre-Genève, 1961, p. 50—51.

5) これについての纏った研究としては，あまり新しくはないが，J. Jüthner, *Hellenen und Barbaren* (Das Erbe der Alten, N. F. VIII), Leipzig, 1923. が現在でも最も参照するに足る文献である。これと少し観点はずれるが，先にも引用した *Grecs et Barbares* (Entretiens, Fondation Hardt), 1961 所収の諸論文，H. C. Baldry, *The Unity of Mankind in Greek Thought*, Cambridge, 1965. やや特殊な立場から扱ったものに，H. H. Bacon, *Barbarians in Greek Tragedy*, New Haven, 1961. などが有益である。

6) Boisacq や Frisk の当該箇所を参照。

7) ただ合成語としては，βαρβαρόφωνος という語が，唯一回だけ（B 867）カリア人の修飾辞として用いられている。いわゆる「トロイア方の軍勢表」においてである。

8) ἄνθρωπος ἀμαθὴς οὗτοσὶ καὶ βάρβαρος (*Nub.* 492) このソクラテスの言葉は，田中美知太郎氏訳では，「こいつの無学なこととときたらギリシア人ばなれがしている」とある。「ギリシア人ばなれ」という訳語は，むしろ第二類の語義に即したものであるが，「無学」というもう一つの形容詞と相俟って，第三類の機能を果していると考えられよう。実際ギリシア人自

身にとっても，バルバロスという語が単独に用いられる場合には，必らずしも正確な意味を捕え難かったためもあろうが，第三類の語義に用いられるバルバロスには，大抵の場合，これを補足して語義を限定するような類義の語（e.g. ἀμαθής, σκαιός etc.）が併用されている様である。

9) ヘロドトスの「歴史」の成立年代は不明であるが，当人はペロポネソス戦争勃発（431）後間もなく死歿していると見られるから，423 初演が判明している「雲」より古いことは確実である。

10) エジプト文明が自国の文明に比して格段に古いことを，ギリシア人が認識したことを伝える文献としては，Herodot. II. 143 で作者がヘカタイオスをだしに使って，エジプトの歴史の驚くべき宏遠さを記している箇所が最古のものと思われるが，実際にはヘカタイオスより遙か以前に遡ることは先ず間違いなかろう。

11) 尤もヘロドトスのあけっぴろげた卒直さや宏量を，ギリシア人一般の特性とすることには異議があるかも知れない。後世のヘロドトス批判なども，それを裏付けているとも考えられよう。しかし少くともギリシア人特有の知性が，ヘロドトスにおいて，もっとも自由闊達に発揮されていることは認めるべきであろう。

12) この人物はもとスパルタの王であったが，陰謀によって祖国亡命を余儀なくされ，ダレイオスの許に身を寄せ，好遇を受けた。以来ペルシア王の側近に仕えて，忠実な相談役となったが，常にギリシア人の特質を王に説いてやまなかった。ヘロドトスはむしろ，ギリシア的特性をプロパガンダする自分の代弁者として，この人物を利用している観がある。

13) *Grecs et barbares*, p. 33 参照。